

たきせ
滝瀬遺跡

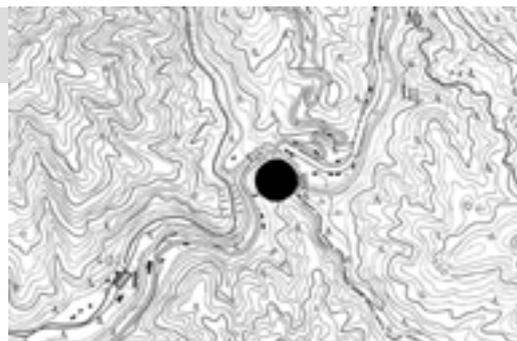
所在地 北設楽郡設楽町大字八ツ橋字タキセ
(北緯35度07分10秒 東経137度34分55秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成27年8月24日～平成27年11月27日

調査面積 1,470㎡

担当者 樋上昇・早野浩二



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 発掘調査は設楽ダム建設事業に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて実施した。遺跡は縄文時代、室町(戦国)時代の遺物散布地として周知される遺跡で、平成27年度は境川に面した段丘上に1,470㎡の発掘調査区を設定して実施した。

立地と環境 滝瀬遺跡は境川右岸の河岸段丘上から山麓の丘陵斜面に立地する。なお、遺跡には江戸時代の伊那街道が通る。

調査の概要 調査区のほぼ中央には巨礫を含む段丘礫が露出し、その下位付近において縄文時代早期から前期と思われる集石遺構群、同中期から後期と思われる竪穴建物、同後期の土坑を検出した。

縄文時代早期から中期前半と思われる集石遺構はその可能性があるものを含めて9基を確認した。遺構の平面形は径0.5～1.5mの円形または楕円形で、明確な土坑状の掘り込みを伴って検出されるものと、掘り込みが浅く曖昧なものがある。集積された礫は拳程度の大きさが主で、被熱したものが多い。

140SL・080SLは・120SL・050SLは土坑内に被熱した礫が充填された状態で検出された。いずれも充填された礫の直下の土坑の底面には濃密な炭化物層を確認した。022SKもこれらと同様であった可能性が高い。120SLは土坑が一定程度埋没した段階で、さらに礫が集積されていた。礫はやや小振りで、疎らである。土坑の再利用(または重複)と考えられる。150SLは明確な掘り込みが検出されず、被熱した礫が散在した状態で検出された。070SLは基盤層中の巨円礫の周囲、090SLは散在する巨礫中に被熱した礫が集積された状態で検出された。040SLは浅い掘り込みの周縁に被熱した礫が集積し、中央には縄文時代前期から中期前半の深鉢が逆位で埋設されていた。040SLを除く集石遺構から遺物は出土していないが、遺跡からは少量ながら、縄文時代早期中葉の押型文土器も出土していることから、これらの集石遺構は縄文時代早期から中期前半のいずれかに帰属する可能性が高いと推定される。

竪穴建物060SIは検出面ですでに床面と石囲炉が露出した状態で検出された。平面形は残存する部分から、径3.0m前後の円形と推定される。遺構から遺物は出土していないが中期後半から後期前葉と推定される。

竪穴建物の付近においては貯蔵穴と推定される土坑180SKが検出された。土坑内からは縄文時代後期の深鉢が良好な状態で出土した。その他、包含層中からは縄文時代後期前葉を主体とする遺物が比較的多く出土している。出土した縄文土器としては、深鉢、注口土器等、石器としては、打製石斧、磨製石斧、切目石錘、礫石錘、石皿等がある。(早野浩二)



滝瀬遺跡15区遺構配置図 (1:400)



集石遺構群全景



集石遺構080SL検出状況